

新学習指導要領「地理B」における「系統地理的な視点」について

佐久間 直樹*

キーワード：新学習指導要領、地理的な見方・考え方、系統地理学的な視点

I. はじめに

1996（平成8）年6月の第15期中央教育審議会第一次答申と、1998（平成10）年の教育課程審議会の答申を受けて、1999（平成11）年3月、文部省から新しい高等学校学習指導要領が告示された。今回の新学習指導要領改訂の最大のポイントは、「各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること」であり、そのための具体的な方策として「総合的な学習の時間」を新しく設定したことである。

地理については地理A・地理Bとも単位数は現行のまま、地理Aは2単位、地理Bは4単位と変わりはないが、内容の方は大きく変化している。特に地理Bでは、現行の「系統地理と地誌が混ざった形」が、新教育課程では、（1）「現代世界の系統地理的考察」と（2）「現代世界の地誌的考察」というように、「系統地理」と「地誌」は大項目ではっきりと分けられた。

II. 「系統地理的考察」と「地誌的考察」が分かれた経緯

今から20年以上前には、世界地誌=地理A、系統地理=地理B（ともに3単位）というように完全に両者は分かれていた。しかし1982（昭和57）年4月から、「これら二つ（系統地理・地誌）の学習に基づく地理的な認識の仕方の基本を身につけさせることができるように両科目の内容及び学習の方法を統合して新しい観点に立って内容の再構成を図った」（文部省、1979）ということで、系統地理と世界地誌を合体させた「地理」（4単位）という科目ができたのである。しかしこの「地理」の教科書はボリュームがありすぎて、前半の系統地理的な部分をゆっくりやっていると、後半の地

誌的な部分が駆け足になってしまいという印象が強かった。また、授業の中で、「系統地理的な視点」「地誌的な視点」というものを教員側が意識的に教えたとしても、教科書にはそんな視点については記述されていないので、生徒はおそらく気にも留めなかっただろう。

1994（平成6）年4月から、現行の地理A（2単位）・地理B（4単位）になった。この地理Bでは、「世界の諸地域のうちから二つまたは三つの地域を適切に選んで取り上げ」、「系統地理的な方法と地誌的な方法との相互補完の関係に留意し、取り上げた地域については多面的に扱うよう努めること」とされ、事例として取り上げた地域を、「ある程度地誌的に扱うこと」が求められている。（文部省、1989）しかし、いっそう両者の関係は混沌とし、多くの教員が教えるのに困難を感じようになってしまったのではないだろうか。いくら教員側が「系統的な方法」と「地誌的な方法」に留意しても、生徒にとってはおそらく理解しにくいものだったと思われる。また、例えば「人間と環境」の単元では、「世界の二つ又は三つの地域を適切に選んで取り上げ、具体例を通して学習できるようにすること」とされ、これによって、生徒がその地域をイメージしやすいようにとの配慮から、教科書の中で地域ごとの細かい記述が多くなり、かえって要点がぼやけてしまいがちであった。

1995（平成7）年1月の北海道高等学校教育研究会の地理部会の講演で、文部省初等中等教育局（当時）の瀧澤文隆氏は、「これまでの地理指導は、一過性の知識重視の指導が多かった。これではいかに知識を覚えても時代が変われば通用しなくなってしまう。変化の時代に対応しなおかつ生涯学習としての地理指導はどうあるべきか。それは

* 北海道南幌高等学校

変化する世界に关心を持ち、読み取り、地理的事象を追究し理解するために必要な調べ方、見方や考え方を身につけることがまず挙げられるだろう。つまり、事実認識から地域の結びつき等を重視する関係認識を大切にする授業。地図、資料、情報の収集、処理、活用し、地理的な見方ができる力を高める授業が考えられる。」と述べられ、「地理的な見方・考え方の育成」を重視されていた。次の学習指導要領改訂に向けてのひとつの方向付けが、この時点で明らかにされていたのである。この考え方は、北海道教育庁生涯学習部高等教育課（1999）にも大きく反映されている。

III. 「系統地理的考察」と「地誌的考察」が分かれ たポイント

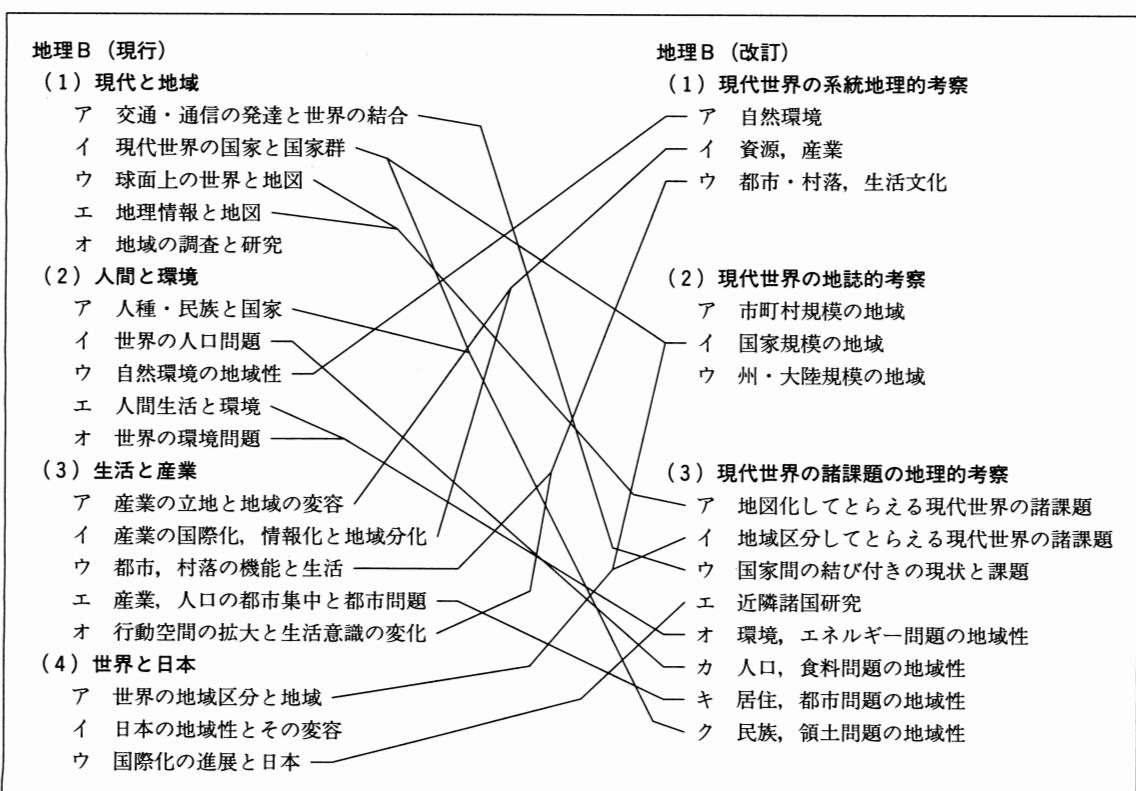
そこで、今回の改訂である。文部省（1999a）に

は、「系統地理的、地誌的、主題的の項目構成を工夫して、それぞれの考察の方法を通して地理的な見方や考え方を身につける学習を一層充実できるようにした。(中略)諸地域の様子を自ら必要に応じて調べるといった学習の転移性が期待できる。したがって変化の時代にも対応できる」とあり「学び方を学ぶ学習」の重要性が強調されている。

大項目を見ると、大項目（1）の「現代世界の系統地理的考察」と大項目（2）の「現代世界の地誌的考察」で、地理的な見方や考え方を学び、そこで学んだことを、大項目（3）の「現代世界の諸課題の地理的考察」で実践・応用していくという、これまでにない構成になっている。（表1）「学び方を学ぶ」という目標を考えると、この構成は非常に期待できるのではないかと思う。

世界を「系統地理的に見る」・「地誌的に見る」

表1 地理B（4単位）における新旧指導要領の項目の比較（文部省、1999 a）
(表中の線は現行の項目が新項目のどの部分に入るかを、筆者が加筆したもの)



新指導要領では、現行の指導要領に比べて項目数は少なくなっている。しかし、現行の「事象の羅列的な項目構成」に代わって、新指導要領では「(1) で系統地理的考察力を養う」「(2) で地誌的考察力を養う」「(3) では(1)(2)で学んだことを実践・応用する」というように、「何のためにめにこの細目を学ぶか」という目的がより意識された項目構成になっている。

というのは、すなわち、「地理的な見方・考え方」そのものである。そういう意味で「系統地理」と「地誌」という分け方を、平成15年度からの今回の改訂で21年ぶりに復活させることの意義は大きい。この点は佐久間（1999）でも指摘されてきた。

IV. 「系統地理的な視点」と「総合的な学習の時間」との関連

1. 総合的な学習の時間

新学習指導要領では、高等学校においても3年間で3～6単位の「総合的な学習の時間」をおこことになった。文部省（1999b）によると、「総合的な学習の時間の学習活動を行うに当たっては、次の事項に配慮するものとする。(1)自然体験やボランティア活動、就業体験などの社会体験、観察・実験、調査・研究、発表や討論、ものづくりや生産活動など体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること。(2)グループ学習や個人研究などの多様な学習形態、地域の人々の協力も得つつ全教師が一体となって指導に当たるなどの指導体制、地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること。」と述べられている。このうち、「調査・研究、発表や討論など問題解決的な学習」や、「地域の教材の活用」については、これまでに我々地理教員が実践してきた研究発表学習や巡検学習などが十分応用できる。その際に留意したいことは、まずひとつめに「学び方を学ぶ」学習であることを意識しながら実施するということである。高校を卒業したあとも、自分で何かを調べたり発表する機会に役立つような活動が望まれるのである。それが生涯学習にもつながっていくと思われる。ふたつめには「系統地理的な視点」をも身につけさせることを意識しながら実施するということである。例えば郷土研究や福祉ボランティア活動を行う場合でも、単にその地域のことだけを考えるのではなく、常に他の地域と比較したり、他の国の福祉ボランティア活動について調べてみたりという学習活動が必要ではないかと思われる。そうすることにより、生徒自身が、自分の住んでいる地域や活動が日本や世界の中でどういう位置づけにあるかを感じ取ることができる。こうした「系統地理的な視点」を身に

つけて自ら視野を広げていく生徒は、社会人としておおいに期待できる人間に育っていくことであろう。

2. インターネットの活用

北海道教育庁生涯学習部高等教育課（1998）でも指摘されているように、インターネットの活用に関する研究も重要である。新学習指導要領では新しく「情報」という教科も設けられた。これによって、「総合的な学習の時間」とも関連して、インターネットの情報を利用した調査・研究、発表学習もこれまで以上にさかんに行われると思われる。Yahoo, goo, infoseekなどの検索エンジンを利用した際に表示される膨大な量の情報を、いかに選択して活用していくか。これはまさに「学び方を学ぶ」学習である。「系統地理的な視点」を身につけた生徒は、地理の分野のみならず、このような情報の分野でも情報を系統立てて分類したり比較したりする能力を發揮することが期待できる。

しかし現実には、現在道立高校に導入されつつあるISDN64ライトの回線1本では、ルーターを介して同時にインターネットに接続できるパソコンは、筆者の経験から言うと、13台くらいが限度である。つまり仮にパソコン教室にパソコンが40台設置されていたとしても、すべてを同時にインターネットに接続させるのは無理なのである。また、有害情報の問題もある。インターネットを導入した学校は、各校とも有害情報除去ソフトをパソコンに入れているが、どうしても防ぎきれない有害情報もある。そこで、絶対安全な方法として考えられるのは、手間はかかるが、あらかじめ調査学習に必要な情報や無害な情報をネット上からリンクのツリー構造そのままに教員用パソコンにダウンロードしておいて、それをLANを通じて生徒がパソコンで見るという疑似インターネットである。この方法を使うと、検索エンジンを利用してのインターネット実習はできないという欠点はあるが、生徒に図書館で調べものをさせる学習と同じ感覚で、40台すべてのパソコンを使って安心してインターネットの実習をさせることができる。

V. 教材づくり・授業づくりで求められる課題

教材づくり・授業づくりの際に、特に留意しなければならないのは、大項目(1)「現代世界の系統地理的考察」において授業でとりあげる事例は、「系統地理的にとらえる視点や方法を学習する」ための例であるということである。

例えば、

①地形や大陸分布によって気候が決まり、気候によって植生や農業分布が決まる。そして人間の居住地域の分布が決まる。

②大地形の分布によって鉱産資源の分布が決まり、それによって工業分布が決まり、人間の居住地域の分布も決まる。

これら①②を「知識として生徒に注入」するのではなく、「系統地理的な視点や方法を学習するための材料として利用」することを意識して、教材づくり・授業づくりを行なうのである。

これから地理は単なる「知識」ではなく、世の中の事象を理解するための「方法」あるいは「道具」となっていくのであろう。日本中・世界中には自分と違う文化・考えをもつ数え切れない人々がいる。それを生徒が知識として頭に貯め込んでいっても意味はない。なぜそのような文化・考えをもつ人々がいるのか、彼らのその起源は何か、自分たちはそれらの人々の中でどんな位置を占めているか、お互いの文化や宗教が異なっていたとしても、その下に流れる共通の部分はないかななどを、授業を通して調べて考えていくこと。これらはまさに「系統地理的な視点」である。そしてそのような調べたり考えたりする方法を、生徒が自らのものとすること。このような「学び方を学ぶ学習」や「考え方を学ぶ学習」が、生徒の「生きる力」や将来の生涯学習に結びついていくと考えられる。そしてさらに生徒が、自分とは違う世界で活動している人々を理解し、それらの人々とネットワークをつくることができるような下地を身につけることができれば、高校の地理教育としては十分使命を果たしたということができるだろう。

VI. 21世紀に求められる社会人像

～「ネットワーク」と「ボランティア」～
1995（平成7）年の北海道高等学校地理教育研

究会第24回大会「小樽・後志大会」の講演で、ニセコ町長の逢坂誠二氏は、「経済効率の街づくりの時代は終わった。人々が豊かさを実感できる街づくりが大切である。高齢化対策などは小さな組織に依存することになるだろう。そのためには地域の人どうしのネットワークが必要。住民が行政に参加しているという実感が必要である」と述べられていた。

今求められるのは、行政機関に何かを言われて動く住民ではなく、自らネットワークをつくって行政機関に働きかけ行政活動に参加していく住民なのである。「こんな生涯学習教室をボランティアで開きたいので、場所を貸してほしい・宣伝をしてほしい」とか「こんなボランティアに興味あるんだけど、インストラクターを呼んでほしい」といった働きかけを住民側から行政機関に行なうのである。特に生涯学習活動や福祉活動においては、高齢化社会を迎える今、行政機関がすべてを考えて行なうことは、人的・予算的なことから考えても不可能である。そこでは住民が主体となって活動せざるをえない。行政機関は活動を援助するのみ。その際のキーワードは「住民どうしのネットワーク」と「ボランティア」である。近頃盛んになっているフリーマーケットなども、そのよい例であろう。

福祉活動については、一部の自治体で社会福祉協議会などが中心となって、ボランティアコーディネーター（「こんなボランティア（例えば雪かき・簡単な買い物など）ができます」という人と「こんなことをやってほしいんだけど」という人を結びつける役割）の活動が始まっている。これもネットワークづくりのひとつであるが、参加者が増えていくのはこれからであろう。若者も含めて住民みんなが自然に地域のネットワークに加わり、みんながボランティア活動を行なえる時代。そしてその活動がNGOなどの形で世界に広がっていく。そのとき、「地理的見方や考え方」「系統地理的な視点」が必要とされるに違いない。私たちが今教えている生徒たちには、そんな時代にいきいきと活動できる人間に育ってほしいと思う。

世代を越えた様々なボランティアの人々が、自然発生的に生涯学習活動や福祉活動を行なう。今回の学習指導要領改訂が、そんな社会に参加する

生徒を育てるきっかけになればと思う。

参考文献

- 佐久間直樹（1999）：新「地理B」における「現代世界の系統地理的考察」について、道高地研会誌第27号「地理教材研究シリーズ」第13集、北海道高等学校地理教育研究会、16～19。
- 北海道教育庁生涯学習部高等教育課（1998）：「北海道高等学校教育課程研究集会 研究成果の要旨 平成11年度」、13～19。

北海道教育庁生涯学習部高等教育課（1999）：「高等学校教育課程 編成の手引 平成11年度」、21～26。

文部省（1979）：「高等学校学習指導要領解説 社会編」、116～148。

文部省（1989）：「高等学校学習指導要領解説 地理歴史編」、162～247。

文部省（1999a）：「平成11年度 高等学校新教育課程説明会資料（地理歴史部会）」、45ページ。

文部省（1999b）：「高等学校学習指導要領」、24～46。

Viewpoints from Systematic Geography in the B-course of Japanese High School's New Curriculum

SAKUMA Naoki*

* Hokkaido Namporo High School